

【基盤研究(S)】

人文社会系 (人文学)



研究課題名 権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築

国立民族学博物館・研究戦略センター・教授 せき ゆうじ
関 雄二

研究分野：文化人類学・民俗学

キーワード：考古学、文化人類学、文明、複雑社会、権力

【研究の背景・目的】

本研究の目的は、50年以上続く日本のアンデス文明研究の成果を踏襲しながらも、権力という新たな分析視点と分野横断的な手法をマイクロ・レベルの考古学調査に導入することで、文明初期における複雑社会 (complex society) の成立過程 (メソ・レベル) を追究し、人類史における文明形成というマクロ・レベルの課題に取り組むことにある。

従来のアンデス文明論は、文明の最終段階であるインカ帝国の研究、しかも古文書研究より復元した国家像を過去に適用するという単純な視点で語られることが多く、また長年にわたる日本の調査においても主眼は詳細なデータ提示にあった。本研究では、膨大に蓄積された日本の研究を再解釈するとともに、新たにデータを充実させ、インカから照射した文明論ではない、オリジナルの文明論を再構築することをめざす。

【研究の方法】

具体的には、アンデス文明のなかでも、文明初期にあたる形成期 (前 3000 年～紀元前後) に焦点を合わせ、ペルー北高地に位置するパコパンパ祭祀遺跡を調査し、遺構、出土遺物の分析を、考古学のみならず、自然人類学、地質学、保存科学など理化学を含む分野横断的体制の下で進める (マイクロ・レベル)。

その際、権力生成の特徴として捉えるため、経済、軍事、イデオロギーという権力の資源を同定し、社会的リーダーがどのような資源の組み合わせで権力を操作しようとしたのかに注目する。

また同時期の他の祭祀遺跡のデータと比較するため、パコパンパ遺跡以外の北高地の遺跡を発掘し、従来の遺跡データを含む GIS データベースを作成し、公開していく。さらには北高地以外の形成期遺跡との比較を行うために、米国人研究者とのワークショップを開催し、文明初期の多様な社会状況を把握する (メソ・レベル)。

こうして得られたアンデス文明形成に関わるデータを、中米および旧大陸の文明形成過程と比較するためシンポジウム等を開催し、アンデス文明を相対化する作業も併せて行う (マクロ・レベル)。

【期待される成果と意義】

権力の解明は、人文科学において古典的なテーマではあるが、従来の研究は記述的であり、方法論も未熟であったが故に、類例間の比較が困難であった。本研究は、社会科学の成果に感化されつつ、考古学や自然科学の手法を理論的枠組みに組み込み、比較を可能にしている点で、独創性や汎用性はきわめて高く、これにより緻密なデータを文明論のレベルにまで導くことが可能になる。

これにより、社会科学分野の独壇場であった権力についての理論研究において、歴史軸を活用した人文科学的研究の関与が可能になり、現代社会における権力分析においても、有効な視点を与えることができると考える。

【当該研究課題と関連の深い論文・著書】

関雄二 『古代アンデス 権力の考古学』、京都大学学術出版会、2006 年

関雄二 「ジャガイモとトウモロコシ : 古代アンデス文明における生態資源の利用と権力の発生」、内堀光基総合編集・印東道子責任編集『資源人類学 07 生態資源と象徴化』、弘文堂、pp.209-244、2007 年

関雄二 「形成期社会における権力の生成」、大貫良夫・加藤泰建・関雄二編『古代アンデス 神殿から始まる文明』、朝日新聞出版、pp.153-202、2010 年

【研究期間と研究経費】

平成 23 年度～27 年度
140,300 千円

【ホームページ等】

<http://www.minpaku.ac.jp/staff/seki/>